

報告タイトル

中華人民共和国建国初期の大衆娯楽の創出とダンス  
“Dance and the Creation of Mass Entertainment in the Early Years of the PRC”

氏名(所属)

大濱 慶子(神戸学院大学)  
OHAMA Keiko (Kobe Gakuin University)

要旨(800字程度)

前世紀、中国全土で人々がダンスに熱狂した時代があった。1949年中華人民共和国の成立から1957年反右派闘争の時期にかけて、「交誼舞」、「集団舞」と呼ばれるダンスが都市部を中心に流行した。全国各地の職場、学校、部隊、工会(労働組合)、文化宮、青年団、婦女連が祝日や休日、週末にさまざまな舞会(ダンスパーティ)を開催し、毛沢東のような国家主席から幹部、知識人、労働者、学生に至るまで大勢の老若男女が手を取り合って踊った。「交誼舞」は民国期の「交際舞」を改良し、読み替えた人民共和国期の社交ダンスの名称であり、「集団舞」は中国の民間舞踊、ソ連、東欧諸国の民族舞踊の諸要素を取り入れ、この時期に創作された集団舞踊である。「交誼舞」そして建国初期の「集団舞」も男女一組のペアダンスが基調となっていた。

このようなダンスの潮流は冷戦時代の東西の分断や資本主義、社会主義両陣営、イデオロギーの対立を超えて世界に共時的に現れた社会現象であった。あまり知られていないこの時期の史実を掘り起こし、戦後の国家の建設、新民主主義と称された時代から社会主義体制への移行期において、上海租界の社交ダンスの遺産を受け継ぎ、つくり変え、中国ではどのような大衆娯楽が創出されたのか探究する。また「交誼舞」や「集団舞」のような大衆娯楽はどのように人々の日常や余暇時間に組み込まれ、生活文化を変え、新たな社会成員を生成させていったのか。人々は「労働人民の娯楽の一形態」とされたこれらの娯楽をどのように受容し、ダンスの実践と身体化を通じてどのような社会関係や親密性を構築したのかについて、都市青年として当時を生きた人々の回想録や日記などの史料を手掛かりに明らかにし、50年代中国において展開された政治運動と表裏一体の文化政策、大衆娯楽の隆盛の実相を解明する